

# 県北 どらくろあ

第57号 2020年12月1日（毎月1日発行）

## 県北新名所案内④

### 「昭和の時代にタイムスリップ」

#### 備後上下ふる里翁館おきな

として思いついたのが、レトログッズの展示館だった。その主旨に庄原市在住の恩地正さんが賛同、設立メンバーに加わった。

オープンはこの年の7月23日。

戦後の高度成長時代に青少年期を過ごした六人のメンバーが、それぞれ自慢のコレクションを持ち寄って陳列している。価格が表示してあるものは、購入することもできる。半年を目安に、展示品を一部、入れ替える予定だという。

上下ふる里翁館には、もう一つの名物がある。2階にある切手博物館「分水嶺」、これは切手のコレクターである藤井会長が、まだスーパを営業していた平成17年にオープンしたものを継承した。分水嶺とは異なる水系の境界線を指す地理用語で、上下町は山陰方面に流れる江の川水系と山陽方面に流れる芦田川水系の分水嶺上に位置している。上下という名前は、水が上（山陰方面）と下（山陽方面）に分かれて流れることに由来するといふ説もある。

今回は県北エリアに隣接する府中市上下町にできた新名の紹介。旧スーパ（チューリップ上下店）の空き店舗を利用して、蓄音機や真空管ラジオ、ねじ式の振り子時計などのレトロな生活用品から、映画のポスター、ウルトラマンや怪獣、ゴジラのフィギュア、屋外のホロー看板等々、マニア垂涎のお宝が展示されている。1階の一部約二百平方メートルのスペースに、その数はおよそ一万点。

「地元の人を元気にするよう」な、人がたくさん集まる場所を作りたい、建物の所有者である藤井徳夫さん（84）の呼びかけで、沖田英司さん、西岡田桂三さんの有志で「上下ふる里会」（会長は藤井さん）を結成、観光客を呼び込み、町内の商店と競合しないもの

取材時に家族連れの入館者がいたのだが、祖父と思われる人物が、大学生ぐらいの若者に蓄音機の使い方を教える姿が印象的



切手博物館には、片側の壁一面に日本列島の地図が描かれていて、その背骨である分水嶺線のブルーラインが引かれ、日本百名山や国立公園、国定公園が表示されている。それらのすべてが、使用済み切手を材料にした貼り絵な

のである。

入口の観葉植物の葉も、よく見ると切手で出来ている。天井を見上げると満天の星座、これもすべて使用済み切手による貼り絵だ。もう一つの部屋には、干支の動物たちや名画が切手で表現されている。これらの作品は、絵心のある女性社員に「業務」として作成してもらったのだという。集客の目的もあったのだろうが、こうした藤井会長の遊び心が、上下ふる里翁館につながったとも言



える。

翁館の開館は週末の土、日曜日と祝日。六人のメンバーが交代で接客している。開館時間は午前10時〜午後5時。入館料は五百円（中学生以下無料）、入場券と共に「上下小判」を進呈、次回からその小判を提示すると入館料が百円引きになる。

上下町は江戸時代、石見銀山から瀬戸内海への銀山街道の宿場町として栄えた。幕府直轄の天領として代官所が置かれ、地域の政治や経済の中心地だった。その面影は、白いなまこ壁や格子戸といった格調高い建物が続く美しい街並みとして、現在でも保存されている。

田山花袋「蒲団」のヒロインのモデルとされる女流文学者、岡田美知代の生家は町屋建築の外観をそのまま生かして、「上下歴史文化資料館」として整備され、岡田美知代関連の資料も多数展示されている。岡田美知代は実妹の嫁ぎ先である庄原市川北町で晩年を過ごしている。

大正時代に建てられた木造建築の芝居小屋「翁座」や、郊外には名湯、矢野温泉がある。観光地としても有名な上下町だ

が、過疎の波に侵食されて人口減少に歯止めがかからない。上下ふる里翁館には、地域の人たちへの恩返しへの想いも強いのだ。

テレビやラジオ、新聞等のマスキミで紹介され、翁館にはたくさんの人たちが来訪、とくに広島市方面から来る人が多いそうだ。コロナ禍でレーザーによる検温や手の消毒、マスク装着を徹底。地元の人にも集まってほしいと、11月22日には芋煮会を駐車場で開催、今後もイベントを随時、計画する予定だという。

田舎町はお金を稼ぐ場所としては厳しいのかもしれない。しかし、楽しむことはできるのだ。翁館を訪問



切手博物館「分水嶺」

してそう思った。庄原市の寂れた商店街に、どら（道楽）書房という古本屋をオープンして六年余りのわたしの実感でもある。



入場すると小判を進呈。次回に提示すると100円引き。



府中市上下町上下 2038-1  
TEL:090-7776-8992 (代表者・藤井徳夫)

# 高橋和巳『悲の器』

## ——旧権威の転換をえぐる

このように戦後の小説を年代順に読んで来ると、1960年代が戦後の転換期だったことがわかります。

経済の飛躍的な成長と歩調を合わせるように、小説が描く世界が段違いに広がりました。高橋和巳『悲の器』（1962年刊、河出書房新社）は河出書房新社が主催の新人賞、第1回「文芸賞」を受賞して登場し、学生の支持を集めました。

今読むと、観念の言葉が多い、ゴツゴツとした文章です。あの時代、こんな難渋な文体が受けたのです。作品は「一片の新聞記事から、私の動揺がはじまったことは残念ながら事実である」と、いきなり核心をつけて始まります。

癌の妻を亡くし、家政婦米山みき（四十五歳）と懇ろになつていた正木典膳（五十五歳）が、高名な大学名誉教授の令嬢（二十七歳）と再婚のはこびとなつたからです。家政婦みきが、正木を相手に、地裁に不法行為による損害賠償の請求を起したのです。これに対し、正木は地方検察庁に、名誉毀損罪を構成すると

逆に告訴しました。新聞が、センサーショナルに取りあげたのです。というのは、正木は実は、かつて

見えぬものと闘いはじめねばならなかった。私は暗示にかかった家禽のように、行動の統一性をうしない、自己におびえる人間となった。……私が最後の拠点とするのも、私の法律家としての名誉にかけて常に法である」と。

### また読んでみたい本<sup>55</sup> 青年たちに 音谷 健郎



【河出書房新社の表紙】

古今東西の文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の青年たちにも読んでもらいたいと思い、毎月1冊ずつ紹介しています。

第55回は、高橋和巳の『悲の器』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧・庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

検察庁検事を務め、某国立大学学部長で、刑法学会の権威でもあるので、新聞、雑誌の激しい非難に對し、正木は傲然と向かっていきます。が、内面の葛藤もみせるのです。「名誉毀損の告訴の対象は、いつしか明確な輪郭をうしない、私は目に

法廷で家政婦みきとの関係は次第に明らかになります。それと同時に、学部長の職務に飛び込んでくる諸事と、戦前の検事当時の回想が克明に語られるのです。例えば、戦後は警職法（警察官職務執行法）の公聴会に招かれ、その正否の討議に加わる

のです。警職法は、50年代半ば、改正案をめぐって反対の国民運動が起った出来事です。

回想に至っては、戦前の法社会、言論統制が蘇ってきます。この統制で研究者仲間の人生が大きく変わっていったのです。このように、小説には、多くの時節の難問が混入し、文庫本で五百円を超えています。

さらには、正木は卒業生を送る講演の形で、法の姿を語っています。「法はその本質においてある種の現状是認性をもっており、一見それが、誤れる保守主義、頑迷な条文主義と見あやまれることがあっても、諸君は、それが進歩の桎梏（しっこく）でも、退嬰的態度でもないことを知っている。……法の本質は、永遠のようにつづく弁論、公開の弁論にこそあることを忘れないでいただきたい」

正木典膳の権威主義的な人物造形、それ故の女性との摩擦、世間からの糾弾よりも、これら知的な論理の展開に引きこまれた記憶があります。小説が、単に文学の世界にとどまっておれなくなった証拠だと思えます。次回は、山口瞳『江分利満氏の華麗な生活』を取り上げます。

## 「草花の博物誌」

著者紹介…一九三一年、比婆郡(現・庄原市)比和町に生まれる。農学博士(九州大学)。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」(シンセイアート出版)から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

## ジャノヒゲ 種は竹鉄砲の弾、根は漢方薬に

初夏、淡紫色の小さな花を開いていたジャノヒゲは、冬を迎える頃、紫色の大きな実を株の間に結んでいます。この球型の実のように見えて、じつは実ではなく種子で、果皮が発達せず、果皮が破れて中の種子がむき出したまま、熟れているのです。手にとってつまんでみましょう。固くて指で力いっぱいつま



んでも、つぶれません。むかしの子どもたちは、ジャノヒゲの種子を竹鉄砲の弾にして遊んだり、種子の皮をむいて、中の白い部分を石などへぶっつけ、はね返ってくる高さを競ったりしていました。そのことで、ジャノヒゲの種子をハズミ玉と呼んでいました。ジャノヒゲとは蛇のひげ、つまり、へびのひげという意味で、細い葉をへびのひげに見たてて名づけられたようですが、へびにはひげがないので、ふしぎです。ジャノヒゲをリュウノヒゲとも呼びます。空想上の動物「龍」には細いひげが画かれているので、これはなるほどと、うなずけます。いつの頃からか、龍から蛇へ変ったとき、そのまま、ひげが受けたがれ、ジャノヒゲとなったのかも知れません。

ジャノヒゲは今から約千三百年前、天平五年(七三三年)に編纂された「出雲風土記」に麦門湯(ばくもんとう)と漢字で書いてそれをヤマスゲと読ませています。奈良時代はジャノヒゲのことをヤマスゲと読んでいたようで、その呼び名がどの時代にリュウノヒゲ、ジャノヒゲとなったのか、

## ツメレンゲ 石垣文化を彩る豊かな自然の象徴

昨年の秋おそく、ほかの草花たちは枯れてしまい、冬越しを始めた頃、やっと満開を迎えたツメレンゲも、冷たい北風の中で、まるで牛のつのような葉をつけたまま、静かに春を待っています。

ツメレンゲと言われても、見たことのある人はきつと少ないと思えます。それもそのはず、ツメレンゲは古い石垣の日あたりのよい小さなすき間に生えていて、石垣を探すと、どこでも見られるというものではないからです。それに古い石垣はほとんど崩されて道路が広げられ、今まで石垣だったところはコンクリートのブロックで固められてしまうと、ツメレンゲが根をおろそうにも、すき間はなく、そこではもう生きていくことができなくなり、絶えてしまうので、ますます人目にふれることが少なくなっているからです。ツメレンゲが牛のつのような形

をした葉をしているのは、石垣のわずかなすき間の石の上にたまった水を貯め、きびしい乾燥に適應しているあらわれです。葉の表面はつやつやしていて固そうに見えますが、割って見ると、中はやわらかく、まるでイチゴの実のようです。

ツメレンゲの葉は、姿、形と違ってきつとおいしいのでしょね。クロツバメシジミという黒っぽい小さなツメレンゲを食べて育っています。ツメレンゲの葉に産みつけられたクロツバメシジミの卵は、幼虫にかえると、葉の中にもぐりこみます。そして、葉の内側をきれいに食べつくすと、葉の中から出てきて、次の葉に移っていきます。クロツバメシジミの幼虫に食べられた葉は、しばらく

く風船のようになっいて、やがて枯れていきます。ツメレンゲの美しい葉を食べて丸々と太った幼虫は石の裏でさなぎとなり、チョウに変身し、自分が生れた石垣から離れることなく、またそこに卵を産み、石垣とツメレンゲのある限り、クロツバメシジミの生命は限りなく続きます。

今、古い石垣がつぎつぎに崩され、ツメレンゲも姿を消しています。そして、クロツバメシジミも同じ運命にさらされています。日本の絶滅のおそれのある野生生物のひとつに指定され、クロツバメシジミを守っていかうという動きがおこっています。いくらクロツバメシジミを指定しても、ツメレンゲの生える石垣を一緒に守らなくては、クロツバメシジミを救うことにはならないと思います。コケむ

した古い石垣は祖先が残してくれた知恵、大切な遺産ですし、そこに生えるツメレンゲは遺産をかざる豊かな自然の象徴なのです。

(写真はいずれも小川光昭氏撮影)



## 「つれづれ歌談」⑥

### 松岡 初枝

早くも師走。冬枯れの木々の中で常磐の松は深い緑を湛え、強い生命力を思わせます。

万葉の人々はこの松の枝を結んだり、枝に願いごとを書いた紙を下げたりして、その強いエネルギーを我が身に移そうとしました。

この結び松に纏わる有名な話があります。孝徳天皇の皇子(みこと)有間は、皇極天皇(重祚)《ちよろそ、一度退位した天子が再び即位すること》して(齊明)の皇子中大兄と従兄弟どうしですが、次の天皇(天智)となるべく中大兄は、身辺の安全を期して有間に謀反の

疑いがあるとして処刑してしまいます。護送される道中、有間は、岩代(いわしろ、現和歌山南部)の松を結びます。

・岩代の浜松が枝を引き結びま幸(さき)くあらばまたかへり見む

もし無事だったら、もう一度松を見ようという歌を詠み、わずかに心を寄せた山上憶良は

・翼なすあり通ひつつ見らめども人こそ知らね松は知るらむ

皇子の魂は鳥となって見ているのだろうか。松だけが知っているのだろうか、いかにも憶良らしい優しさで若者の死を悼む歌を詠みましたが、この時代には少なからずあった政治的な悲劇を語る深い意味が読みとれます。

・除夜の鐘ききつつ開くわが窓に平成二年の星空明し

年の瀬、先の皇后美智子さまは、右の歌を詠みました。昭和天皇の喪が明けようとする年末、新年からいよいよ天皇、皇后として本格的な活動が始まるという決意の歌ですが、三十余年後の今年も、まさに令和二年です。



肌色の縮緬（ちりめん）で作った手製のマスクをつけた女性が来店した。セミロングのきれいな栗色の髪が印象的だ。

「あの、この本なんですけど」

単行本をガラスケースの上に置いた。櫻小路綾香の「青い瞳の市松人形」、裏表紙の見返しに貼った専用の値札を確認すると、350円が300円に訂正してある。

「落書きがしてあるから値引きしませぬ」と言ったときの彼女の不思議そうな視線を思い出した。著者のサインなのだが、芸能人気取りで崩している。周囲に散らした桜の花びらのマークもあざとく、わざとらしい。「買い戻しですな」

確認した。読み終わった本を持参すると、その値札の半額を、新しく買う本から値引きするというサービスをしている。子供の頃に親しんだ貸本屋をイメージしたもので、「貸本屋システム」と名付けている。レンタルだと帳簿管理が煩雑だが、これだと何も記録をつける必要がない。本が気に入れば、そのまま手元に置いておけばいい。

今ではすっかり定着しているのだが、致命的な欠陥にも気づいた。本が減らないのだ。開店当初は棚の本

も少なくてありがたかったが、高齡過疎地では本を処分したい人の方が圧倒的に多い。在庫は増える一方だ。「いえ、実はお訊きしたいことがあるんです」

持参した本を開いて、見返しのサインを示した。

「作者の方から贈呈された本だと言われていましたが、親しい方ですか？」そんな自慢をしたのかと顔が赤ら

## 市松人形

あきふゆひこ  
亜木冬彦

現代御伽草子 ⑤1

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

「まあ、古い知り合いですが、別に親しくは……」  
「ちょっと待った！ 先輩、ひどいじゃないですか」

背後から大きな声があった。がっちりした体格にスキンヘッド、顎髭を蓄えている。

（店には出て来るなど言っておいたのに）

コロナ禍での政府の観光支援事業「GOTOトラベル」を利用して東京から遊びに来た。PCR検査は陰性だったと胸を張るが、田舎町の噂の怖さを知らない。

「わたしが櫻小路です」

本名は佐久良浩司、この髭面のむさ苦しい男が、少女向けのファンタジーノベルの人気作家、櫻小路綾香の正体なのである。

佐久良が「アッ」と声を上げた。双眸が青く輝いていたからである。「鳥取にいる母方の祖母から受け継いだ人形です」

鹿子絞りの着物の生地が相当に色褪せている。肌の胡粉もかなり黒ずんでいる。古い市松人形であることは間違いなかった。

市松人形の始まりは、江戸時代だとされている。佐野川市松という美貌の歌舞伎役者がいて人気を博した。その容姿を模した人形が発売されるようになり、「市松人形」と名付けられた。市松のように美しい子に育つようにとの願いを込めて、市松人形を贈ったという。

「おい、マスクをしろよ」

うっかりしていたとばかりに照れ笑いを浮かべて、スポーツタイプの黒いマスクを装着した。

佐久良の自己紹介が終わると、彼女が瞳を輝かせて、「見ていただきたものがああるんです」と、手提げの紙袋から唐草模様風の風呂敷に包まれたものを取り出した。おかつば頭の人形が現れた。その顔を見た瞬間、

目の前の人形は、髪の毛が少し赤茶けている。小さな唇のまん中に、愛らしい歯が覗いている。そして、大きな青い双眸。決定的なのは、右目の下にある黒ずんだ小さな傷だった。まるで泣きぼくろのように見えるのだ。それらのすべての特徴が、櫻小路綾香の小説「青い瞳の市松人形」に出て来る人形に合致していた。「おまえの小説は、この人形がモデルなのか？」

佐久良が大きくかぶりを振った。わたしが東京で燻っていたときの同人誌仲間だった。ルポライター志望

で、衛生材料の業界新聞で記者をしていたが、少女向けのファッション雑誌の懸賞小説に応募して受賞、デビューした。

純文学系の同人誌だったので「大衆に迎合して文学の魂を売り渡した」などと、時代錯誤の批判を浴びたが、内心は羨ましくて仕方がないのだ。佐久良のように売れる文才が少しでもあれば、黴臭い魂など即座に投げ捨てて、編集者に尻尾を振っていただろう。



話なんですよ」

骨董屋巡りが趣味の佐久良は、とりわけ西洋のアンティークドールを熱心に収集している。本人は口を濁しているが、それが離婚の原因らしい。

「そのおやじが仕入れて地方を流して、そうそう、珍しいものを見ましたよと言って話してくれたのが、青い目の市松人形のことなんです」

「それは鳥取か？」

「そうであれば話がつながる。」

「残念ながら、北陸の方だと言ってました」

「北陸のどこでしょうか？」

「彼女が勢い込んで口を挟んだ。」

「祖母は、福井の小浜から鳥取に嫁いで来たんです」

佐久良が残念そうにかぶりを振った。

「詳しい場所は聞いていません」

「おい、すぐに電話して確認しろ」

「無理ですよ、電波が届きません」

「海外にでも引越したのか？」

佐久良が天井を指さした。

「去年、心臓麻痺で亡くなりました」

彼女が大きな瞳を伏せた。

櫻小路綾香の小説は、高校生の沙耶香が実家の蔵の中でみつけた青い

瞳の市松人形に導かれて、江戸時代にタイムスリップ、自分のルーツを辿るといふファンタジーだ。

漁村の網元の娘が父無し子を産んだ。その赤子は青い目をしていて、鬼にかどわかされて、鬼の子を孕んだと噂された。真実は、難破したオランダ商船の生き残りの若者を匿って……。

「彼女、髪を染めているんですかね」

佐久良が尋ねた。わかるわけはなかった。名前もまだ知らないのだ。

「美人ですよね」

「マスクをしていてわかるのか？」

「当然です」

「口が裂けているかもしれないぞ」

「いつの時代のギャグですか」

佐久良が苦笑した。

「おれ、しばらくここで暮らそうかな。元々がテレワークなんで、東京にいる必要はないんですよ。鉾脈が見つかるともかもしれない」

鉾脈——、作家にとつての重大なテーマ、文章は下手なくせに、嗅覚は鋭いのだ。佐久良も見たのだろう。光線の具合もあったのだろうが、彼女の瞳が一瞬、淡い青色を帯びて輝いたのを。

## まちの古本屋さん どろ書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
  - ・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日（2月は店内整理で全休）
- TEL: 090(9913)3052
- 営業時間 9:30～18:30

※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

< 広告料 1/4 ページ 1 回 2,000 円 半年間 9,000 円 1 年間 15,000 円 >



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

### 「消えた少年たち」

オースン・スコット・カード 著 早川書房

パソコンがまだ家電になる前の時代。コンピューターゲームのプログラマーのステップは職探しに難航し、一家で新天地に引っ越してくる。就職した会社での上司との軋轢や長男の異変に苦慮する中、身近に奇妙な出来事が……。

分厚い物語の中で、ある意味新鮮な興味を引かれたのが、ステップ一家が敬虔なモルモン教徒だということ。宗教観に根ざした生活の実際が詳細に描かれている。次々と少年が消えて行くという事件が縦軸なのだが、推理小説だと思って読んでいたら最後で肩透かし、でも、この結末もありかと納得。すべては神の御心のままに！



### 「身分帳」

佐木隆三 著 講談社文庫

身分帳の正式名称は収容者身分帳簿。刑務所の受刑者の詳細なデータが記載されている。節目節目で紹介される身分帳のデータがリアル。モデルがいるから当然か。山川一(はじめ)は喧嘩で人を死なせて服役中に、数々の暴力事件を起こして旭川刑務所まで移送された。出所した時は44歳になっていた。

中年の前科者が周囲の助けを得て更生に苦闘する日々が丹念に描かれている。見栄っ張りな怒りんぼだが、正義感が強くて人情家、いつの間にかエールを送っている自分がいた。西川美和監督が読直後に映画化を決意、「すばらしき世界」というタイトルで来春、公開予定。



### 「笑いの侵入者」

阿刀田高 編 白水社

何を讀んでいいかわからないという人には短編のアンソロジーがお勧め。自分の好きな作家、作風を見つけることができる、かも。この本の編者は阿刀田高で白水社とのコンビとなると、やはり曲者ぞろいが13人、シニカルな笑いがぎゅっ詰まっている。

井上ひさしの「足袋」は才能がきらめいている。小松重男の「唐傘一本」は単純に大笑い。色川武大の「すけこまえれじい」、軽妙な語り口が魅力。有明夏夫の「FL 無宿のテーマ」、キツネうどんを食べるためだけに単身日本に戻って老後を通ぐす移民富豪の爺さん……、アレ、どこかで讀んだことがあるような。思わぬ邂逅も嬉しい。



## どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・ 店内で販売した本は、どら紙幣(店内専用通貨)であれば半額、現金であれば3割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引
- ・ 書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

## どらくる俳壇&歌壇

満州の秋夕焼けを老女恋ふ

近藤 昌平

枯れつきて棒立ちの叢曼殊沙華

富久光

小春日や布団を干して忘れをり

片岡 正人

前あぶり後ろをあぶる焚火かな

隆愚

今日の月米寿の亡夫と酌み交す

大楨 三代子

本読みて誰のいびきぞ炬燵猫

赤川 冬人

胎の子は母のいのちを吸い生れる

松岡 初枝

明日の世界がいかにあるとも

## 投稿&寄稿

季節の風物詩

「湯湯婆（ゆたんぼ）」

隆愚

中世、中国から伝わった当時は「湯婆」。これを、唐音読みで「たんぼ」といいました。「婆」は、おばあさんのことかと思ってしまうですが、中国では、自分の奥さんを指すときも使うとか。奥さんの代わりに抱い

て寝るのが「湯婆」だったということです。次第に「たん」が「湯」だということが忘れられたため、「湯」を付け足し「ゆたんぼ」になったといえます。

※参加を歓迎します。

## 「熊谷守一展」

赤川仁洋

三次市にある奥田元宋・小由女美術館の「生涯百四十年熊谷守一展」に行った。副題は「わたしはわたし」、熊谷様式と言われる独特の画風を表現しているのだろう。

風景画でもくつきりと輪郭線を描いて、べったりと単色を塗り込んで行く画法は、まるでデザインでも見ているようで、熊谷自身が書いているように「素人が描いたような下手な絵」だとも、一見して思える。しかし、一度見たら忘れられない絵であり、時代を経ても占びることがない。

初期の頃の絵も展示されている

が、本格派でとてもうまいのだ。東京美術学校の同級生には青木繁や関谷敬次、児島虎次郎などの俊才・鬼才がいたが、熊谷の画力はいちばん高く評価されていたという。

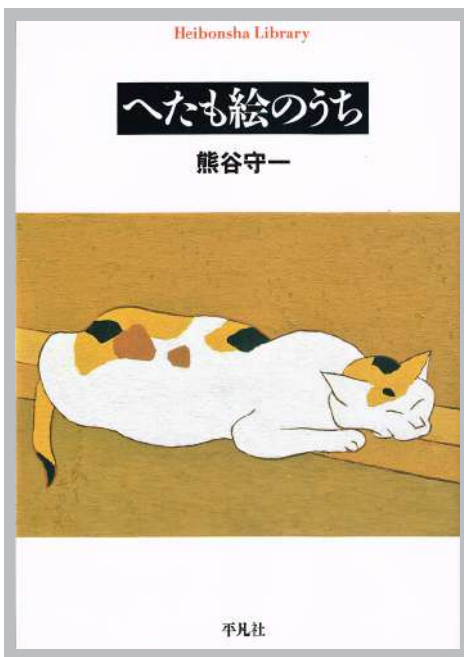
対象の本質を描くのであって、画家の技量が表に出ては邪魔をする――、そんな印象を、いや迫力を絵から受けた。しかし、後年になって描かれた日本画は、画才を抑えきれずに玄妙、書に至っては自由自在、達人なのである。

「下品な人は下品な絵をかきなさい、ばかな人はばかな絵をかきなさい、下手な人は下手な絵をかきなさい」熊谷の画学生へのアドバイスだ。

お金のための絵を描けなかった熊谷は、赤貧で三人の子どもを病死させた。晩年に足を悪くしてからは、自宅の門の外へは出ずに、

身近なものを描き続けた。「これ以上人が来てくれても困る」と文化勲章も辞退している。

ひとりでもやりたいことがありますか？ コロナ禍で個々人に問われているような気がする。



短期連載寄稿 林原正好（鳥取県倉吉市）

「毛利家臣の赤川氏について」（その6）

3 閔閔録赤川系譜における問題点

(1) 『小早川家文書』の系図における赤川氏に関する記述

閔閔録赤川系譜において赤川氏は小早川氏の流れとされているので、小早川氏の系図を見てみる。

『大日本古文书家わけ11小早川家文書』には、3編の系図が載せてある。「二小早川家系図」、「二沼田小早川家系図」、「三竹原小早川家系図」である。

このうち、「二沼田小早川家系図」（以下、「沼田系図」という）には、赤川氏に関する記述が一方所だけあり、忠茂の注記として「赤川祖」と記されている。この系図では忠茂以降は誰が赤川の流れなのか不明であるが、清茂、茂教、貞茂の流れが閔閔録赤川系譜と一致するので、この流れが赤川氏の流れではないかとの推測は可能である。なお、この系図には貞茂より後は載っていない。

また、「一小早川家系図」（以下、「小早川系図」という）には、忠茂から貞茂の流れは沼田系図同様載っていない

るが、赤川氏に関する記述がなく、赤川氏との関わりが見受けられない。

(2) 閔閔録赤川系譜における問題点

小早川系図を見ると、亡くなっていく者には「死」と記してあり、生存者が特定できる。沼田小早川氏では宣平・資平・貞平・氏平・氏實、竹原小早川氏では重景・景継、忠茂系では茂秀、清忠、頼平、貞茂、保平である。家系図の成立時期は1350年頃とみられるので、これらの者は南北朝初期の1350年頃に生存していたと考えられる。なお、これらの者が南北朝初期に生存していたことは他の古文書でも証明が可能である。

一方、閔閔録赤川系譜によると、忠政・義重の時に毛利時親の芸州下向に随ったとされており、毛利時親の芸州下向は延元元（1336）年とされているので、忠政・義重は南北朝初期の1336年には生存して活動していたことになる。また、忠

政は貞茂の9代後となっている。

以上のことから、1350年頃に生存していた貞茂の9代後の忠政が1336年当時に生存していたこととなる。これは年代的に矛盾があるといわざるを得ない。

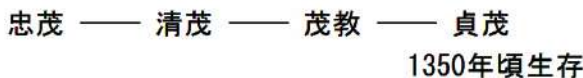
また、小早川氏の系図では、沼田系図には忠茂の注記として「赤川祖」とあるが、小早川系図には赤川氏に関する記述が見当たらない。

このことについては、小早川系図は南北朝初期の成立で、その記事も他の文書とよく符合するが、沼田系図は小早川系図より後年の成立で誤った記事が多々認められ、小早川系図に比べれば信頼性に乏しいといわれている。このことから、例えば、沼田系図は小早川系図を底本として、何か他の文献（閔閔録赤川系譜など）に基づき、忠茂に「赤川祖」という注記を追加した可能性もあると考えられている。

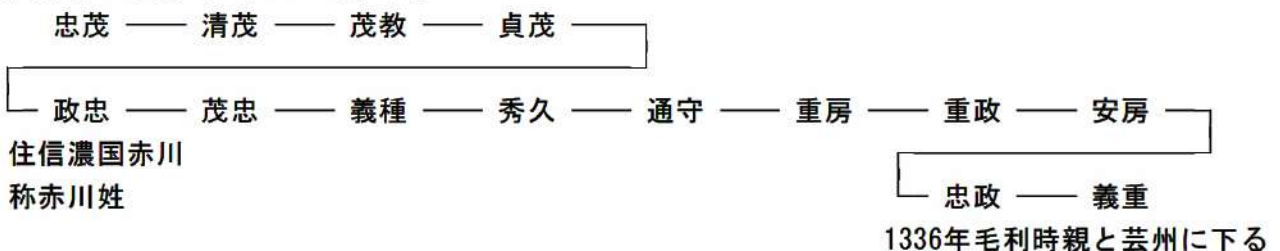
このように考えてくると、「忠茂から貞茂」と「政忠以降」は別の系譜ではないかという疑念がわいてくるし、2つの系譜が無理矢理にくっつけられているという印象を受ける。閔閔録赤川系譜においてどこかに齟齬が生じていると考えざるを得ない。（連載は今回で終了です。）

（参考図）

【小早川系図（忠茂から貞茂）】



【閔閔録赤川系譜（忠茂から義重）】



# どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など  
情報掲示板です。

● **一 硬式テニス参加者募集 一**  
MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)  
場所：三次運動公園の屋内&屋外コート  
・火曜日 (9:30 ~ 12:00)  
・水曜日 (9:30 ~ 12:00)  
・土曜日 (10:00 ~ 12:00)  
● 連絡先：中川 (☎080-5610-2376) ●



## 「旧暦カレンダー」(販売価格：1,650円)

- ・日本の自然に根差した暦(こよみ)です。
- ・太陽暦でも太陰暦でもない、「太陰太陽暦」です。
- ・新暦(太陽暦)も併記しているので便利です。
- ・季節の行事や呼び名の意味が、より深く理解できます。
- ・自然災害の予測ができます。

**どら書房にて令和3年度版 予約受付中!**

## 《情報&原稿を募集します!!》

- 仲間募集
  - 教室&講座案内
  - イベント情報
  - あなたの大切な本の紹介
  - ボランティア・ライター(現地記者)募集!
- ※応募先はどら書房・赤川まで。  
掲載は無料です。

## どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して  
いるので、ダウンロードして  
お楽しみいただけます。

<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

## 「仲間になってください」

障害者や高齢者の施設に出向いていろんな行事のお手伝いをしたり、災害被災者の救援活動をしています。「出来る時に、出来る事を」をモットーに、活動を楽しんでいます。

福祉ボランティアグループ・庄原市まちづくりを進める市民活動登録団体  
ほほえみの会

連絡先：寺岡隆行 (TEL&FAX 0824-72-2793 携帯 090-7540-9029)

発行：どら書房  
〒727-0012  
庄原市中本町 2-1-10  
☎090(9913)3052 (赤川)  
e-mail: touzin@nifty.com  
年間購読料：2,000円(郵送費込)

誌面デザイン：ROUTE183  
協賛：九日市愛好会

◇先月号の「つれづれ歌談」、凡河内躬恆の読みは「おこうちのみつね」ではなく「おおしこうちのみつね」ではないかと指摘を受けました。後の解説者により異なる様で、どちらも間違いではありません。

◇来年の新年号より1枚減、2ページ少なくなります。発行者(赤川)の「都合」ですが、タイムリーな企画がありましたらまた増やすつもりです。

◇コロナの第三波も和の力で乗り切りましょう。

## 編集後記

◇備後上下ふる里翁館に参加している庄原の恩地正さん、どら書房にも振り子時計や蓄音機、映画のポスターなど、懐かしグッズを提供&展示させていたいただいています。

第 238 回

# しょうばらくんちいち 「庄原九日市」

令和 2 年 12 月 9 日 (水) 9:00~13:00

## 庄原九日市とは？

天正年間（440年前）に物々交換で始まった市（いち）

昭和年代の戦争で途絶えていた市を、市街地活性化ボランティア活動として空き店舗などを活用し 2001 年に復活

## TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」

12月8日～10日 10時～15時

わら細工作品展・高齢者手作り作品展

★どら書房 →休憩所あります！！

月曜日と火曜日はお休みです。

但し、九日市の日は営業します。

★九日市に“大黒さん”出演 「サービス品あり」

★楽笑座で「まかない食堂」「うた声喫茶」中止

★きくや →総菜とお寿司の店頭サービス！！

★風龍 →九日市スペシャルで餃子200円！

## 出店配置図



出店申込みは、【毎月 20 日締切】 コンパネ 1 枚スペース 1,000 円～ 九日市愛好会事務局  
〒727-0013 庄原市西本町 2-1-10 楽笑座内 TEL/FAX 0824-72-8285

ホームページ  
<http://www.kunchi-ichi.jp>

